

## 東大EMP第9期プログラム 最終報告発表 概要

(2013年9月14日)

チーム・メンバー	課題テーマ	タイトル	概要
<p>[チーム1] 後藤 聖治 齊藤 卓也 戸矢理衣奈 八代 文夫 山次 康幸</p>	<p>健康的で活力のある、超高齢化社会経営を前提とした、日本発の普遍的思想の発信について</p>	<p>脱・自我実現。「次世代の自己実現」をサポートする、新たな人生観の提案</p>	<p>世界の平均寿命は延び、なかでも日本は人口高齢化の諸問題に真っ先に取り組まねばならない状況下で、国内外から解決策への注目度が高まっている。 EMPでも過去8期に亘り、これら諸問題に対する様々な解決策が提案されてきた。我々9期は、これらを俯瞰しつつ、各種の提案が効果的に機能していくために必要な思想を提案する。特に着目したのは、定年後の長い余生を、いかに有為に、かつ自発的に生きるかの下支えとなる、高齢者自身および社会の思想である。 キーワードのは2つあり、1つ目は曹洞宗の教え「直下承当」である。すなわち、年齢を経て拡大した自己の枠組みを、我欲を満たすためだけに使うことなく、他者を受入れるスペースを設け、智慧、時間、コストを次世代につなぐ思想である。もう1つは「快」であり、「好きなこと、得意なこと」だから、進んで他者に貢献し、育成する自発性を幾つかの事例とともに提案する。併せて、これが普遍性を持ちうるかも言及する。</p>
<p>[チーム2] 平良 義郎 多田 克行 立野 公一 中村 謙介 三木 啓介</p>	<p>資源・エネルギー活用の規律による環境保全</p>	<p>エネルギー政策のアポリア</p>	<p>エネルギーは我が国の社会・経済活動の基盤をなす重要なインフラであり、昨今の地球温暖化問題とも相まって、我が国が優先して取り組むべき先進課題である。それにもかかわらず、東日本大震災や福島第一原発事故以降、我が国のエネルギー政策はアポリア(行き詰まり)に陥り、国民が納得できる解決の糸口すら見出せていない。 これまで我が国のエネルギーを巡る議論は、その複雑さ故に政府、有識者、電力会社等の一部の専門家に委ねられてきたが、東日本大震災以降パラダイムは大きく変化し、全国民が我がこととして関心を寄せている。 本発表では、このようなパラダイム変化を前提として、これまでのエネルギーを巡る議論を批判的に振り返りつつ、課題を明らかにした上で、我が国のエネルギー政策のアポリアを打開するための新たなソリューションスペースを提供する。</p>

<p>[チーム4]          天津 康          伊藤 憲祐          上村 洋祐          雲嶋 寧彦          福原 敏幸</p>	<p>多様な宗教、文化、政治を前提とした共通行動規範確立</p>	<p>共通規範確立を促すシステム</p>	<p>我々のチームが取り組んだテーマは「多様な宗教、文化、政治を前提とした共通行動規範確立」である。しかし人間はそもそも押し付けられなくとも、社会の中で他者との共生の仕方を手探りしながら、行動規範を自ら育んでいくものではないだろうか。</p> <p>我々はまず、この点を議論の出発点とした。しかし複雑に変化し多様な価値観が幾重にも絡み合う現代社会においては、行動規範がゆっくりと育まれていくことだけを期待し静観して済む状況ではないだろう。固定的な規範を強制するのではなく、かといって自然発生的に人々の間に確立されるまで静観するのでもなく、幅広く受け入れられる規範をどのようにしたら確立していけるだろうか。このためには何より人間の本質に反することなく、むしろそれに訴えることが重要であろう。これによって人間が本来持つ規範確立能力の背中を押し、結果として広くダイナミックに規範が浸透していく枠組みが構築できないだろうか？</p> <p>我々は8期までの課題認識と検討結果もふまえつつ、更に議論を深化させ、抽象論に留まらない具体的なソリューション・スペースを提言する。</p>
<p>[チーム5]          岩瀬 豪          小林 健典          杉瀬 純          高橋 秀行          林 えつこ</p>	<p>先端科学技術の効用と新世界観の形成</p>	<p>共生可能な先端科学の促進に向けて          ～橋元的解決策～</p>	<p>科学技術の進展は目覚ましいものがあり、今後もさらに進展し、人類の幸福に貢献するものと大きな期待がかけられている。その中でも、ゲノムや再生医療などの生命科学は加速度的に進展している。しかしながら、生命科学の進展は同時に科学だけでは判断できない「トランスサイエンス領域」を拡大させ、このまま研究が進展することに対して社会は不安を感じ、結果として、生命科学の発展を阻害するといった悪循環が生まれている。</p> <p>社会の中で生命科学の発展を促進するためには、科学者がきちんと研究できる仕組み、社会が科学に興味を持ち少しでもリテラシーを高めること、そして社会が対話を通して科学を共に発展させる循環が必要だと我々は考えている。この循環のスピードを速めるためには、今までの取組に加え、ややradicalな思想も必要との仮説に基づき、新たに「小悪」導入による先端科学と社会との共生について提言する。</p>